



TITLE:

追憶文 堀江保蔵先生を偲んで

AUTHOR(S):

角山, 榮

---

CITATION:

角山, 榮. 追憶文 堀江保蔵先生を偲んで. 經濟論叢 1991, 148(4-5-6): 190-194

ISSUE DATE:

1991-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/44797>

RIGHT:

# 經濟論叢

第148巻 第4・5・6号

## 哀 辭

故 堀江保蔵名誉教授遺影および略歴

G・マリーニズの外国為替論 (1).....	本 山 美 彦	1
19世紀末ドイツ電機工業における労働能率増進策 (4).....	今久保 幸 生	22
スコットランド坑夫繫縛制変遷概観 (2).....	加 藤 一 弘	48
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と 日米合弁企業の位置づけ (2).....	石 川 康 宏	70
低開発国におけるドラーリゼイション (dolarization).....	安 原 毅	87
持続的インフレーションと政府.....	国 宗 浩 三	104
時間選好に関する基礎的な考察.....	依 田 高 典	122
短期調整過程の二類型 (1).....	森 岡 真 史	140
追加償却会計と取替原価償却会計.....	藤 井 深	162

## 研究ノート

FASB 1976年討議資料に関する研究ノート .....	藤 井 秀 樹	181
-------------------------------	---------	-----

## 追 憶 文

堀江保蔵先生を偲んで.....	角 山 榮	190
堀江保蔵先生を偲ぶ.....	山 本 有 造	195

学会記事・經濟論叢 第147巻・第148巻 総目録

平成 3 年10・11・12月

京都大學經濟學會

追 憶 文

堀江保蔵先生を偲んで

角 山 榮

勲二等瑞宝章，京都大学，京都産業大学各名誉教授，経済学博士堀江保蔵先生は，平成3年8月23日，京都市北大路の浜田病院で87歳の天寿を全うされた。告別式は上京区上御霊馬場町の御自宅の近く長林寺において，真夏の太陽照りつけるなか，別れを惜しむ人びとが多数参列するなかでとり行われた。

堀江先生は昭和3年京都帝国大学経済学部を卒業後，大学院において本庄栄治郎先生の下で経済史研究にたずさわれ，講師，助教授をへて昭和20年3月教授，その後同42年3月に定年退官されるまで，経済学部長，附属図書館長などの要職を歴任された。定年退官後は京都産業大学教授となり，同44年4月から47年3月まで副学長を勤められた。同53年3月に退職されたのちは，家庭で過ごされることが多かったが，悠々自適，もっぱら趣味としてこられた囲碁を友とし，晴耕雨読の日々を送っておられた。平成元年5月，京都国際会館で举行された経済学部創立70周年祝賀会の席上で，記念講演をされるお元気な姿を拝見したのは，ついこのあいだのことであった。だから先生はお元気でお過しのこととばかり思っていた。

ところが平成3年6月19日，突然奥さんから入院中の先生の病状が悪化したというお電話を頂いた。先生が入院していらしたとはまったく寝耳に水で，早速堀江ゼミ生ら関係者に連絡するなど慌たしくなった。病床に駆けつけたとき，手術後の先生は意識もはっきりしておられ，いつもの元気なお声で退院する日の話をしておられた。

しかし奥さんの話では，6月1日囲碁の友人を訪ねるべく家を出られた先生は，地下鉄北大路駅近くの路上で躓いて転倒され，救急車で浜田病院へ運ばれた。そこで治療と精密検査を重ねるうちに，内臓がんに侵されていることが発見されたということであった。そのことを先生が御存知であったかどうか知らないが，暑い夏場を過ぎ涼くなれば，自宅へ帰れる日を楽しみにしておられる様子であった。しかし奥さん始め御家族の献身的看病の甲斐もなく，ついにそのまま帰らぬ人となられたのである。悲しいかな，

入院わずか3ヶ月足らず、先生は永遠の眠りにつかれたのであった。

先生が遺された業績は、経済学部長、図書館長などの行政的活動、社会経済史学会常任理事、経営史学会理事としての学会活動、その他多方面にわたる社会活動があるが、ここではふれないで置く。一方、御専門の経済史関係の業績は、著書・論文多数、そのうち著書の数だけでも約20冊にのぼる。この短かいスペースでは先生の学問的業績の全貌はとても紹介できないが、敢ていくつか焦点をしばって先生の業績を回顧し遺徳を偲ぶことにしたい。

さて、戦前におけるわが国経済史研究を振り返ってみると、その中心は東と西とに分れていて、両者の間にどの程度交流があったかどうかよく知らないが、西の中心はいうまでもなく京都帝国大学であった。とりわけ本庄栄治郎先生を中心に昭和4年にできた経済史研究会、その後それが発展して昭和8年に創設された日本経済史研究所、ここがまさに日本経済史研究のメッカといわれたところであり、若い学者が多数集い研究は活況を呈していた。月刊機関誌『経済史研究』の発行、『日本経済史辞典』の編纂などをつうじ、日本を代表する優秀な日本経済史家が多数輩出した。本庄先生の直弟子である先生もその一人であった。『経済論叢』99巻1号（昭和42年1月）の堀江先生退官記念号に掲載された「著作目録」をみると、戦前の先生の論文の殆んどすべては『経済史研究』及び『経済論叢』に寄稿されたもので、いまの若い人からは奇異に見えるかもしれないが、昭和6年に創設された社会経済史学会の機関誌『社会経済史学』へは昭和19年に一篇寄稿しておられるだけである。こうしてその成果を一冊の本にまとめ世に問われたのが、『我国近世の専売制度』（日本評論社、昭和8年）である。本書は実証主義を貫く本庄史学の精髓で、学界から高く評価され、戦後も臨川書店から復刻版が出た古典的名著の一つである。

私は昭和17年9月、経済学部に入學、当時訓育指導班という今風にいえば一種のプロゼミの制度があり、偶々堀江先生の指導班に所属していた。歴史に関心のあった私は、そのまま2年生から始まるゼミにも堀江ゼミに残った。ゼミといっても学徒出陣前の約2ヶ月間、毎週1回先生の家で夜遅くまで「南進論」その他をテーマに報告し討論し合った出陣ゼミであった。回を重ねる毎に、召集令状がきて一人減り二人減っていった。とにかくゼミといっても落ちついて資料を読んだり、先生から近世文書の読み方を教わ

るような環境にはなかったが、みんな戦場へ赴くことの意味を歴史の中に見出すことに懸命であった。

ところで戦後の歴史研究は、周知のように戦前の「日本資本主義論争」の継承・復活から始まった。戦前の堀江先生は本庄史学の下にあったので、この論争に直接関与されたことはない。しかし時代の問題に鋭敏な先生は、先生なりに一つの見解をもっておられた。その一端は昭和13年に出版された『日本資本主義の成立』（大同書院）の中に見られる。本書はマルクス主義が盛んな当時の学界からは殆んど無視されたのは当然であるにしても、いま読み返してみると、戦後先生がいち早く近代成長史学の立場に立って明治期経済史研究に着手し、『明治維新と経済近代化』（至文堂、昭和38年）を上梓されたのも、実は本書の中にその芽が準備されていたことが分る。

いまでこそ日本経済の「近代化」という用語は常識化されているが、当時は駐日米大使ライシャワの反動的路線として学界の反発を買う用語であった。それを敢て標題に掲げた著書を出版することは勇気のいる行為であった。先生にその勇氣と自信を与えたもの、それは先生が早くからアメリカに出張し、世界の学者との交流をつうじてえた情報と確信であった。だから先生の日本近代化論は日本国内よりか海外で注目され、先生の研究室には欧米の学者やアジアの留学生の出入りが絶えなかった。

昭和30年代初めから退官されるまで、先生の誕生日である正月5日に、毎年先生の家へ私たち卒業生とともにアジアの留学生が何人か招かれ、国際色豊かな新春放談会が開かれた。先生がもっとも愉しみにしておられたのもこの新春放談会であったし、私たちもこのささやかな国際交流の場から多くのことを学んだのであった。日本はどうしていつまでも民主化・近代化を達成できないのかといった「封建遺制」の廃棄を問題にしていた当時の学界状況の中であって、日本がなぜ欧米以外の世界でひとり急速な近代化・工業化に成功したかという議論が、外国での日本研究の中心的課題になっていることを知ったのも、こうした国際交流の場からであった。同時に、私自身にとって「封建論争」から脱却する契機にもなった。

そこへ私事に亘って恐縮であるが、昭和38年文部省在外研究員としてLSEへ1年間留学する機会が与えられた。イギリスの学達たちの日本を見る眼は近代化された日本であり、ときには見習うべき日本であり、しだいに日本に対する関心が高まりつつあった時代である。しかしイギリスを訪れる日本の学者や歴史家は、その殆んどすべてが封建

的、非近代的日本論者であった。私が無名の地方大学の一留学生であるにもかかわらず、ロンドン大学市民大学部主催の3日間の合宿セミナー「日本問題」の講師として招かれ、ドーア教授、ニッシュ博士とともに講義する光栄に浴したのも、近代化論の先駆者堀江先生の御指導・訓育の賜物と感謝している。

話が少し脇道へそれたが、先生の日本経済近代化論と一体になっているのが、経営史研究であり、その柱をなすのが一つは「近代企業家の発生」、いま一つが日本的経営システムの核をなす「家」の研究である。

そもそも経済発展の主体として近代企業家や企業家精神が注目される契機になったのは昭和30年代中頃の東畑精一・中山伊知郎らの『経済主体性講座』であった。しかし先生は戦前すでに『日本資本主義の成立』の中で「企業精神」という一節を設け、とくに士族の間に企業心が養成されたことを論じておられた。その構想を戦後発展させたのが「近代日本の先駆的企業家——石河正龍と大島高任——」（『経済論叢』84巻3号、昭和34年9月）をはじめとするいくつかの論文である。しかし先生がもっとも情熱を注がれたのが、昭和36年滋賀大学で開催された社会経済史学会大会においてオーガナイザーとして企画・運営された共通論題「近代企業家の発生」であった。先生の問題提起はシェンペーターとか、A. H. コール、T. S. アシュトン、C. ウィルソンなどの企業家論をまとめたもので、そのときの共通論題は、のちに当日の報告者の論文も含め、社会経済史学会編『近代企業家の発生』（有斐閣、昭和38年）として出版された。

いま一つ「家」の研究は、終身雇用、年功序列、企業別労組、集団主義にみられる日本の経営のルーツをどこに求めるかという問題と絡んで、先生晩年の研究の中心をなすものであった。憶えば退官講義のテーマも「日本経済史における『家』の問題」であった。そして先生最後の著書になったのも『日本経営史における「家」の研究』（臨川書店、昭和59年）であり、本書には既発表の論文6篇のほか、新稿2篇も加えられているところをみても、いかに先生が「家」の研究に執念を燃やしておられたかが分る。

しかし「家」の問題はむづかしい。私も折にふれて何回ともなく先生から「家」が日本社会と経済に果してきたメリットとデメリットを承った。堀江先生からだけではなく、文学部の田辺元先生からも昭和20年2月の退官講義で、懺悔道の哲学を述べられながらいかに自分が「家」の束縛からの解放に苦闘してきたかを涙ながらに懺悔された壮絶な講義をきいていたこともあって、私にとって「家」の問題はかんたんに結論を出すこと

はむづかしい。先生の問題提起は、しばらく熟するまで暖めさせて頂くことにして筆をおく。